

島根県立美術館
研究紀要

第6号

2025



島根県立美術館
研究紀要

Bulletin of
Shimane
Art Museum
第6号

2025

島根県立美術館研究紀要

第6号

目次

IKKO'S AMERICA

奈良原一高のアメリカ時代

葛谷 典子 4

IKKO’S AMERICA

奈良原一高のアメリカ時代

蔦谷典子

はじめに

写真家・奈良原一高（1931-2020）は、1956年に初個展「人間の土地」で鮮烈なデビューを飾った。この個展以降、若い写真家たちが結集して写真のセルフ・エージェンシー「VIVO」を結成する。日本の戦後写真を大きく変貌させたいというの、まさに中核にいたのが奈良原一高である。その後3年間ヨーロッパを巡り、帰国して5年間日本に滞在。そして、再びアメリカへ旅立った¹（4-6）。

本稿では、奈良原が滞在したアメリカでの4年間を考察していきたい。奈良原は、この時期に自分は写真家なのだということを明確に自覚することとなる。というのも、1956年の初個展のときは、奈良原はまだ早稲田大学の大学院生であり、前衛芸術の渦中で《人間の土地》を制作し、個展として発表したばかりの名もない学生だった。個展終了後一転して、最も注目される新人写真家と目されるが、奈良原自身は写真家になるという確固とした意志はないままだった。むしろ写真家となってしまった自己の存在に疑問を抱きつつ、写真の道を歩んできたといえる²（1-3）。その奈良原が、自分は写真家だという認識を明確に持ったのが、アメリカ時代である。そして『消滅した時間』をはじめとする珠玉の作品群を生み出していく。それは、主に国内での評価にとどまっていた日本の写真家が、アメリカでその存在感を示す第一歩でもあった。奈良原一高という写真家にとっても、日本の写真史においても重要な奈良原のアメリカ時代をここでは検証していきたい³。

第1章 アメリカへ

第1節 ニューヨークのロフト

奈良原は、3年間のヨーロッパ滞りを終えて帰国する1965年5月、ニューヨークに2週間立ち寄っている。当時開催されていたニューヨーク万国博覧会を見るためであり、ヨーロッパを巡った次の移住地はアメリカだという意図があつたことだった。この頃ニューヨークでは、前衛芸術家たちが、古い倉庫を改造し自宅兼アトリエの「ロフト」として活用していた。1965年からニューヨークを拠点として活動していた奈良原の親友・河原温（1932-2014）もそのひとりだった。奈良原と河原が初めて出会ったのは、ふたりとも20代初頭の1954年のことである。この時、河原が東京で個展を開催した際に、奈良原は河原の作品《浴室》2点を購入し、河原温作品の最初のコレクターとなった。翌1955年に結成された、演劇・文学・美術・写真・

映像などの総合的な領域の作家たちによって、今日的リアリズムを追求する前衛集団「制作者懇談会」にともに参加している。以後生涯にわたってふたりは親密な交友を続けた。渡米後、河原は、「日付絵画（デイト・ペインティング）」で注目されるコンセプチュアル・アートを展開していた（7、8）。その河原が広いロフトで制作しているのを見た奈良原は、ニューヨークに滞在して自分のロフトをもって制作したいという切なる願いを抱く。帰国して日本に滞在した5年間、アメリカへの渡航費、ロフト制作費、滞在費を捻出するため、奈良原は旺盛な仕事を展開した。

「制作者懇談会」と同年の1955年に結成され、奈良原もオブザーバーとして参加していた「グループ“実在者”」の仲間である池田満寿夫（1934-1997）や鬚嘔（1931-）も、この頃ニューヨークにいた。1958年に渡米し、1960年にはキャナル・ストリートにロフトをかまえていた鬚嘔は、フルクサスの活動を展開していた。池田満寿夫は、ニューヨーク近代美術館で開催された「池田満寿夫の版画」展のため、1965年7月に渡米する⁴（9-10、11-12）。池田は当初、鬚嘔のロフトに居候していたが、その後転々として、1970年1月にはソーホーのグランド・ストリートにロフトを構え、1972年3月にイースト・ハンプトンにアトリエ兼自宅を建てることとなる。奈良原は滞米期に池田や鬚嘔とも交流している。

1970年4月、奈良原は妻・恵子とともにハワイを経由してニューヨークに着いた⁵。当初、ホテルに宿泊していたが、知り合いの写真家ヒロ（本名・若林庸宏 1930-2021）の計らいで、彼の住むダコタ・ハウスに居候することになる。ヒロはファッション写真家として活躍しており、リチャード・アベドン（1923-2004）の弟子だった。ヒロを奈良原に紹介したのは、ファッション評論家の大石尚である。大石は、1958年の「王国」展を見て、奈良原をファッション写真に誘ったのだった。

高級集合住宅であるダコタ・ハウスは、女優のローレン・バコール、作曲家・指揮者のレナード・バーンスタインらが住み、後ジョン・レノンがこの自宅前で殺害されたことでも知られる。奈良原は、1カ月ここに仮住まいをしながらロフトを探した。ようやく、靴工場だったところを見つけ、アトリエ兼住居として改築をはじめ。極力自分たちの力で仕上げ、無理なところのみ業者に委託した。半年に及ぶ大工仕事の結果、ロフトは完成した（14-17）。1970年は終わろうとしていた。

第2節 ダイアン・アーバスのワークショップ

年が明けると奈良原は、写真家・ダイアン・アーバス（1923-1971）のワークショップに通

4 | IKKO'S AMERICA 奈良原一高のアメリカ時代

い始める⁽¹⁸⁾。アメリカで将来を期待される新人写真家はだれかとヒロに問うと、ダイアン・アーバスの名が挙がった。そのダイアンがワークショップを始めると聞き、参加を希望して訪ねた。奈良原は、すでに3冊の写真集を発行している写真家だったにも関わらず、写真集など1冊も発行しておらず、まだアメリカでもあまり知られていないダイアンのワークショップに参加したいという申し出に、ダイアン自身も驚く。奈良原は、「いままでの仕事は忘れて、ゼロから写真を新しく考え直してみたい」と説得し、参加することとなった⁶。

ダイアンのワークショップは、1971年初めから2カ月にわたって全8回、毎週木曜日の7時から開催され、生徒は30人を超えていたという。ダイアンの出題によって各自が制作して持ち寄った写真を語り合った。ダイアンが最も気に入った奈良原の写真は《ジャクリーン・マスクの二人》1970年⁽¹⁹⁾だった。ハロウィーンの日にはロフトのあるビルの入口で撮った、この頃奈良原が試みていたもう一度目を向けたい「セカンド・ルックのある写真」である。一方、公園の木々をコンセプチュアル・アートの手法で撮影した写真にはダイアンは真っ向から反論した。

ダイアンのフリークスタちを撮影した一連の写真は、自身が無色透明になってその場の空気に溶け込み、写される人々も安心してありのままの姿で定着されている。それは別格の強さをもっていた。奈良原は、現代美術の新しい息吹に直接触れることのできるニューヨークで、美術と写真を比較・考察しつつ、写真は美術とは一線を画すべきであり、ドキュメンタリーが写真の核だと考えるようになった。60年代には画像の合成などの手法も使っていた奈良原が、アメリカではストレートな写真の撮影を主軸として続け、作家の存在を消し去ったような透明な眼差しで対象を捉えていった。

ワークショップが終わったその年の夏、7月26日にダイアン・アーバスが自殺した。奈良原は非常なショックを受ける。その後、ダイアンのパートナーだったマービン・イズラエル（1924-1984）と知り合い、ニューヨーク近代美術館写真部長のジョン・シャカフスキー（1925-2007）と『カメラ毎日』の編集・山岸章二（1928-1979）とを結び付け、ダイアンの回顧展開催に向けての流れが始まる⁷（20、21）。

奈良原が滞在した時期、アメリカは写真の在り方が大きく転換する時期だった。それまで、『ライフ』や『ルック』などのグラフ・ジャーナリズム全盛の時代を反映して、写真は印刷に付され大量にそのイメージが流布して意義を持つと考えられていた。やがて、そうした時代は終焉を迎え、写真家の制作したプリント自体を展覧会で発表するという流れに変わった。プリントを取り扱うギャラリーが開設され、美術館や個人コレクターによって、コレクションとして収蔵されていく。その後日本にも押し寄せることとなる波が一足早くアメリカの写真界に広がって

いたのである。

1971年6月にはまた、奈良原はルイジアナ州、マックレアで開催されたロック・フェスティバル「生きる歓び（Celebration of Life）」に参加している。前年にブロードウェイでロングランとなった映画「ウッドストック／愛と平和と音楽の三日間」を観て奈良原は感銘を受けており、40万人の若者を集めたこの伝説のコンサートが上映されると、映画館にいる若者も、映像の中のロック・フェスティバルの参加者となり、映像と現実空間が一体化していった。この時期、公民権運動が高まり、その指導者だったキング牧師が凶弾に倒れるなか、ウッドストックは愛・平和・反戦を主張する若者たちによる人間性回復の集会の頂点と言われた。その流れにある1971年に開催されたロック・フェスティバルに奈良原は参加したのである。ニューヨークからグレイハウンド・バスで南下し、途中からはヒッチ・ハイクの旅で、会場まで到着した⁽²²⁾。しかし、フェスティバルはなかなか始まらず、連日の猛暑のなか待ち続けるうち、集まって来た観衆たちは、自然に助け合い生活していく。奈良原は撮影を目的とせずに、フェスティバルに参加するためにやって来たのだったが、時折写した写真で、その後写真集『Celebration of Life 生きる歓び』を制作した^(23-26,55)。「僕はまさしく彼らのひとりとして、そこに共に生きていたのだし、それ故にこの本は同時代的なポートレート（a portrait of the time we shared）なのだ」と記している⁸。

渡米1年目、アメリカと日本の違いに思いを巡らしていた奈良原は、2年目となり、アメリカの人々の中に飛び込み溶け込んでいった。そして、これ以降「IKKO」と名前を変えて作品を発表することとなる。本稿でもこれよりIKKOと記す。

第3節 第1回アメリカ横断・1971年

この年、IKKOは第1回アメリカ大陸横断撮影旅行を決行する。1971年8月末、ニューヨークを出発し、コロラド州デンバーまでグレイハウンド・バスで行った。その後20日間かけて、レンタカーで大西部を廻り、再びバスで10月初旬頃、ニューヨークに帰還した。

この撮影旅行は、アメリカ西部の雄大な自然を巡ることを目的としていた。巨大な人口湖レイク・パウエルを中心としたコロラド州、ユタ州、アリゾナ州、ニューメキシコ州の4州には、グランド・キャニオンをはじめとする大自然の驚異のパノラマが次々と展開した。

「アリゾナの砂漠に車を走らせるとき、僕たちは地上ではないもうひとつのプラネットに投げこまれたような錯覚に襲われる。どこまでも透明に見える空気は真空の月面のように超現実的な光景の輪郭をきわだたせる。地質学的にはいかに古いか説明されても、僕の目には今出来立て

の風景のように見透して映る。」⁹

IKKOにとって車はタイムマシンのように感じられた。デンバーからアルバカーキへ南下し、そこからフラッグスタッフをめざして国道66号線を西へ走ると、バリンジャー・クレーターが現れる。アリゾナ砂漠の真中にある、約5万年前に隕石が落下した痕跡である、直径1.2km、深さ200mの巨大な隕石口は、IKKOに月面を想わせた¹⁰ ⁽²⁷⁾。化石の森、ペインテッド・デザートを経て北上し、アーチーズ国立公園を抜けて進むと、ユタ州とコロラド州の境界ヴァーナルの崖には、おびただしい恐竜の化石が埋もれているダイナソア国定公園に到達する。

その西はIKKOが「峡谷の王国」と呼ぶ絶景が続く。キャニオンライズ、ブライス・キャニオン、グレン・キャニオン、グランド・キャニオン、そして人口湖レイク・パウエル。ページ近くのアリゾナ砂漠を疾走する自らの車を撮った《砂漠を走る車の影—アリゾナ》⁽²⁸⁾は、まさに異次元の旅という感がある¹¹。

グランド・キャニオンは、アリゾナ州北部に広がるコロラド高原が、コロラド川による長年の浸食作用で削り出された峡谷であり、大自然の驚異のひとつとされ、地球の歴史を刻む地層の重なりが露出した雄大な景観を繰り広げる。1979年に世界遺産に登録された。《グランド・キャニオン—アリゾナ》⁽²⁹⁾は、赤いスポーツカーを降りて缶ビールを飲みながら、その威容を眺める二人の男が写されている¹²。悠久の時を刻む自然と現在の日常が交錯している。

続く人口湖レイク・パウエルの眺望は、奈良原に大きな感銘を与えた。1956年に始まったコロラド川を堰き止めるグレンキャニオンダム建設が1966年に完成し、コロラド河が戻されると、新しく水を湛えたパウエル湖を形成した。1969年に保水が開始されてから1980年まで17年かかって高水位となった。

「3000万年を超える深い峡谷の侵食の時間を一気に水が満たしたとき、星のもつ宇宙的時間と人間の生む人工的刹那が折り重なってこの湖は超現実的な時空の静けさをたたえた」と称している¹³。《人口湖の見えるプールサイド—ユタ》⁽³⁰⁾は、地球外の真空地帯のように感じられ、その中に車やプールという現実の存在が現れて、シュールな趣を醸し出す。まさに「出来立ての風景」のようにひとつひとつの存在が際立って見える。《レイクパウエルの水路—ユタ》⁽³¹⁾は、現実を超越したようなその水路を進むIKKO自身の興奮が伝わってくる。

モニュメント・バレーは、ユタ州とアリゾナ州の州境にあり、300メートル以上もあるピユート（残丘）が並び、モニュメント（記念碑）のような景観を見せる。先住民ナバホ族の聖地であり、居留地となっている。茶褐色に染まる広漠たる荒野は、西部劇の映画の舞台として、映画監督ジョン・フォードが「駅馬車」など多数の映画撮影を行っていることでも知られる。

IKKOは1971年にも、翌1972年にも訪れ撮影している。

IKKOは、現在とはるかな過去が「メビウスの帯」のように連なる光景に圧倒された。

第2章 第2回アメリカ大陸横断 1972年

第1節 ネイティヴ・アメリカンの痕跡

1972年、IKKOは第2回アメリカ大陸横断の撮影旅行を敢行する。青いシンボレーの67年型ステーション・ワゴンを購入して、鍋や釜、マットレスなどキャンプ用具を積み込み、6月27日にニューヨークを出発、10月5日に帰宅するという3か月半に及ぶ旅だった⁽³⁵⁾。

前年の第1回横断より南側のルートを通り、ペンシルヴァニア、オハイオ、イリノイ、ミズーリ、オクラホマの各州を進み、7月4日にニュー・メキシコ州のアルバカーキに到着する。10日まで滞在して近郊を廻った。まずは、ホワイト・サンズに向かう。

ホワイト・サンズは、ニュー・メキシコ州南部に位置する白い大砂丘地帯である。ここは2億5千万年前には海だったため、プランクトンの死骸などが固まって石膏となり、それが隆起して大ドームを形成したが、崩れて盆地となった。周囲の山脈から石膏を溶かした雨が溜まり、乾燥して透明石膏という結晶状の石膏を残した。風化と侵食が結晶を砂状に砕き、風が運んで白い砂丘を作り上げたのだ。

IKKOは、ここで稲妻に遭遇する。《ホワイト・サンズの稲妻—ニュー・メキシコ》⁽³⁶⁾は、夜の闇に稲妻が光る幻想的な作品である。白い砂丘に点在する日除け付きのピクニック・テーブルが、点景のシルエットとなって小さな宇宙船のように並ぶ。1950年には、空飛ぶ円盤に乗船したという「ホワイト・サンズ事件」が起こった地としても知られる¹⁴。

第2回大陸横断でIKKOは、ホワイト・サンズなど第1回では訪れることが出来なかった場所に足を延ばそうとしたと同時に、追求すべきテーマが明確にあったと考えられる。第一に、ネイティヴ・アメリカンの痕跡である。アコマ・プエブロ、タオス・プエブロ、ナバホ族、ミウォーク族、スー族など、ネイティヴ・アメリカンの存在に惹かれてその居留地や遺跡を訪ねている。

IKKOはまず、アコマ族の村に車を走らせる。「スカイ・シティ（天空都市）」として知られるアコマ・プエブロは、継続して居住しているアメリカ最古の先住民の集落である。ニュー・メキシコ州中部にある、高さ112mの切り立った岩山は、頂上が平らに広がる卓状台地であり、「メサ」と称される。この頂上に建設されたのがスカイ・シティだった。周囲すべてが断崖という地形は、侵略者に対する防衛に優れている。また、砂、砂質粘土、わらなどの有機

素材で作られた天然建材「アドベ」を、木枠に入れて干したアドベレンガを組み上げた壁は、耐久性に富み、建物の内部を涼しく保つ。ここはその「アドベ建築」の集落だった。

IKKOは、7月11日、ここで代表作として知られる《二つのごみ罐ーニュー・メキシコ》を撮影した⁽³⁷⁾。「村の広場の中央にはコヨーテや犬のいたずらを避けて宙吊りにごみ缶が設けられていた」と記している¹⁵。湧き上がる雲の浮かぶ空を背景に、広場のゴミ缶を地面から仰ぎ観るように撮影し、まるで宙に浮いているように見える。ゴミ缶の影を覆い焼きで薄くすることで、より一層浮遊感を強めている。周囲にはアドベ建築が映り込む。ここでも、メサの威容を表現するのではなく、日常生活の中のゴミ缶に注目し、アコマ族の“今”を伝統的な家屋とともに映し出している。

タオス・プエブロは、1000年以上継続して定住している先住民プエブロ部族の集落である。ニュー・メキシコ州タオスの約1マイル北に位置する。赤褐色のアドベレンガにモルタル状のアドベを塗った複数階からなる集合住宅は、世界遺産となっている。IKKOは、タオス・プエブロとその近郊のレッド・リバーに立ち寄り撮影している。ここでも、日常的な光景《村のガソリンスタンドーニュー・メキシコ》を取り上げている¹⁶。

7月16日にIKKOは、ニュー・メキシコ州からアリゾナ州へ入り、前年に続いてモニュメント・バレーを訪れた。モニュメント・バレーはナバホ族の聖地であり、一定の自治権を保有した「ナバホ・ネイション」として、アメリカ最大の保留地を領有している。《ロックバンドーアリゾナ》⁽³⁸⁾は、ナバホ族のロックバンドの演奏者たちが席を空けたときに撮影している。完璧なまでに美しく神秘的なモニュメント・バレーを背景に、置き去りにされたかのような楽器が、不思議な時空間を創り出している¹⁷。

「岩の峡谷」を意味するキャニオン・デ・シエイは、アリゾナ州の北東の端にあり、ナバホ族の境界内となる。高さ300mの垂直の断崖が、42kmの長さにわたって続き、ホワイト・パレスなどの先住民の集落遺跡群が広がる。《刻まれた矢印ーアリゾナ》⁽³⁹⁾は、不穏な雲の浮かぶ空の下に、キャニオン・デ・シエイへの道標となる矢印が彫り込まれた岩を映し出している¹⁸。

第2節 ネイティヴ・アメリカンたちの精霊

IKKOは、その後カリフォルニア州に入り、山間の松林に囲まれた小さなキャンプ場に宿泊している。この夜IKKOは、残り火を眺めているうちに、ただならぬ気配を感じた。周囲の樹々の息づかいが聴こえてきたのである。ここは、ネイティヴ・アメリカンのミウォーク族の住んでいたところだった。「僕はこの時、人間と相対するように樹々を感じることが出来たし、語り合

うときのあの歓びの時間帯を持つことが出来たのだった」と記している¹⁹。先住民たちの「精霊」を間近に感じたのである。

ネイティヴ・アメリカンたちは、偉大なる精霊のもと、動物も人間も平等で、土地も財産もすべて共有物と考えていた。家族は深い愛に包まれ、野生の生き物たちも、食料とするのに必要なだけを採用した。精霊が人びとの道徳心と行為とに指標をあたえ、すべて生きるものたちの行動に動機をあたえていたのである。「白人たちの邪悪な影響力によって汚される以前の、純正な北アメリカ未開人こそは、およそこの地上に見出し得る自然人のもっとも高潔な例を世界にみせているものである。」と称された²⁰。

1492年にヨーロッパ系白人が、現在の北米地域に到達すると、昔から居住していた先住民たちは領土を追われ、さらに白人入植者の西進により、大量虐殺、民族浄化、強制移住は凄惨の度を増した。『白い征服者との闘い』のなかで、スー族の元酋長レッド・フォックスは語っている²¹。スー族は、アメリカ北部中西部に先住する部族であり、勇猛果敢で、北部平原で最も勢力を誇った平原の先住民である。1868年、アメリカ合衆国はスー族とララミー砦条約を結び直し、スー族や周辺のパラドの先住民の聖地であるブラックヒルズを含む、今日のサウスダコタ州のほぼ全域を「白人の侵略の許されない、スー族の不可侵の領土（偉大なるスーの国）」と確約した。しかし、ブラックヒルズに金鉱があるとわかると、連邦政府は金を求めて不可侵条約を侵し、ブラックヒルズ戦争が勃発する。その後1890年には、スー族の一行に対して、米軍が無差別虐殺を開始し、ウーンデッド・ニーの虐殺が起こる。

この先住民の聖地であるブラックヒルズにあるラシュモア山の露頭に、1927年から1941年にかけて、アメリカ合衆国の成立・発展・開発を記念する4人の大統領、ワシントン、ジェファーソン、ルーズベルト、リンカーンの高さ18mに及ぶ巨大な胸像が彫り込まれた。ラシュモア山国立記念碑として知られるが、ここは古くからアメリカ先住民の聖地である。聖地を切り刻み建てられたのである。

IKKOは、《サウス・ダコタ州 ラシュモア山国立記念碑》（1972年）⁽⁴⁰⁾で、ラシュモア山の本来の形状を残す側を、そこに光があたる時間に撮影している。その反対側の影にわずかにワシントンの彫像が覗く²²。IKKOのスー族へのレクイエムを感じさせる作品である。

第3節 カリフォルニア・ゴールドラッシュ

カリフォルニア州道49号線は、シエラネバダ山脈の麓にあるゴールド・ラッシュ時代の多くの町を結んでいる。IKKOは1972年にこの道を辿った。もうひとつのこだわりだった。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

カリフォルニア・ゴールド・ラッシュは、1848年1月24日、コロマのサッターズミルでジェームス・ウィルソン・マーシャルが金を発見したことに始まる。金を求めてアメリカ全土や海外から30万人もの人々がカリフォルニアに押し寄せた。1849年にカリフォルニアに向かった者が多かったことから、初期の採掘者は「フォーティナイナーズ」と呼ばれた。

ゴールド・ラッシュの影響は甚大で、サンフランシスコは、1847年から1870年の間に500人から15万人に人口が増加し、新興都市に成長した。1855年にはパナマ地峡鉄道が開通し、カリフォルニア中に道路・教会・学校が建設され、新たな町ができた。

一方で、その開拓は古来の猟場や釣り場などの食物採取地域から、先住民たちを追い出すこととなった。先住民族は、病気や飢餓、また虐殺的攻撃の犠牲になり、1845年の推計人口15万人から1870年までに3万人足らずまで激減した。

IKKOは、1971年の第1回大陸横断でも、ジェローム、コロラド・スプリング、シルバートンなどゴールド・ラッシュの後にゴースト・タウンとなってしまった町を訪れている²³。そして、ゴースト・シティとして知られるジェロームの町に赴いた⁽⁴¹⁾。アリゾナ州中央のヴェルデ溪谷を見下ろすクレオパトラの丘に、19世紀後半にできたジェロームの町がある。全盛期には豊富な銅鉱山に支えられ、1890年には250人だった人口が、1930年には20倍の5000人となる。しかし10年後には半減し、30年後には再び250人ほどとなった。かつて銅山で栄えた町は、今ではゴースト・シティと呼ばれている。

IKKOは、ジェロームの町はずれの古い墓地で、遠い異国に生まれた人々の19世紀の墓標をみつめる。「砂漠で隔絶されたこの丘ひとつの内に、ひとはこの国の出生のドラマそのものを読みとることが出来るだろう。さまざまな国から集められた多様の統一であるこの国の今日は、力と論理という相反する性質のものがコロイド状に混じり合いながらつくられて来たのだろう」²⁴。そして10月、IKKOは、ニューヨークに帰る。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

なかの1961年5月、アメリカ大統領ジョン・F・ケネディは、1960年代中に人間を月に到達せると声明を発表した。そして、1969年7月20日、アポロ11号で人類初の月面着陸に成功したのだった。

アポロ17号は、アポロ計画における最後の有人月面着陸となる。1972年12月7日午前0時33分、アポロ17号は月へと旅立つ²⁵⁽⁴²⁾。打ち上げの時の凄まじい轟音と光と衝撃波に襲われるなか、ゆっくりと空へと舞い上がった。そこに人間が乗っているという感銘で、IKKOは膝頭の震えを抑えることができなかった。乗船している宇宙飛行士を見送ったはずの自分たちが逆に地球上に取り残されたように感じた。

「この時、僕はこれまでの生涯をかけてたどって来た一切の視野を改めて振り返るような気持ちがした。そこには個人的な視座を通して宇宙的な視野に帰ってゆくという旅の姿があった。足元の草叢のほのかに揺れる輝きから始まるこの地球上の生活、何気ないその世界が急にたまらなく愛しいものに思えたのである。」²⁶

SF作家アーサー・C・クラークは、『宇宙文明論』の一節で「われわれは今、ひとつの海からはい上がって、もうひとつの海、すなわち宇宙への旅の途上にある」と記し、IKKOはしばしばこの言葉を引用している²⁷。クラークは、映画「2001年宇宙の旅」1968年のもとなった短編小説の作家であり、製作・監督であるスタンリー・キューブリックとともに脚本を書いた。1968年4月11日、日本で公開され、その2日後に映画「猿の惑星」が公開された。この映画で地球に帰還したはずのアメリカ人宇宙飛行士が降り立ったのは、猿の支配する惑星だった。さらに、この猿の惑星は核戦争で荒廃した未来の地球であり、主人公は砂に埋もれた自由の女神像を発見するという衝撃的なエンディングを迎える。60年代以降SFに執着していたIKKOは、無論これらの映画を見ていた。宇宙開発競争のなか、宇宙への夢と思索が膨らむ時代、アメリカはIKKOにとって「宇宙に最も近い国」だった。

こうしてIKKOは、1971年と1972年にアメリカ大陸横断2回と縦断2回を果たした²⁸。その後、ロフトの暗室に籠り、フィルムの実像・プリントに専念していった。その時の様子を池田満寿夫は記している。「（IKKOは）何万枚かの写真を撮影してしまうと、22丁目の自分で改造した暗室から出てこなくなってしまう。いつ電話しても、一高は今暗室にいますという恵子夫人の応答に出会った。」²⁹

『*IKKO'S AMERICA*』は、1971年5月15日に出版されたSF作家アイザック・アシモフの自伝的小説である。主人公は、1951年6月14日にカリフォルニア州のオランダに生れたアイザック・アキラ・アサヒ。父は日本人、母はアメリカ人である。アイザックは、1967年12月7日のアポロ17号の打ち上げに同行する。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。アイザックは、月面着陸に成功した。この小説は、アポロ17号の打ち上げから、月面着陸までの物語である。

1973年の春に、IKKOはニューヨークで同時にふたつの個展を開催した。ひとつは、ナイク

^[1] IKKO'S AMERICA 奈良原一高のアメリカ時代

ルー・ギャラリー（3月28日-4月29日）、もうひとつはニコン・ハウス（3月28日-4月30日）においてである⁽⁴³⁾。この年、ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真美術館（ロチェスター）でも個展が開かれたが、遅れて11月に開幕となった。後に写真集『消滅した時間』として纏められる写真を主に出品している。IKKOはそのプリントに没頭し、完璧なアーカイヴァル処理によるプリント技術を身につけ、極めて質の高いプリントを仕上げていった。再び、池田の言葉を引用する。

「『消滅した時間』のシリーズがニューヨークの個展で発表された時、私はイースト・ハンプトンから110マイルをドライブしてオープニングに駆けつけた。（中略）ニューヨークで展示されたプリントされたばかりのオリジナルを久しぶりに見た時、彼がニューヨークのロフトの暗室にこっそり閉じ込もっていた意味がやっとのみ込めたのであった。なんとといってもプリントそのものの美しさに驚嘆しないわけにはいかなかったからである。（中略）私は写真のプリントにもマチュエールの美しさがあるという事実をすっかり忘れていたのだ。」³⁰

個展が開幕すると、「IKKO 日本からマンハッタンへ」という大きな見出しで、「ニューヨーク・タイムズ」日曜版に記事が掲載された³¹⁽⁴⁴⁾。ところが、記事は悪評で知られる評論家による辛辣なものであり、ジャパン・バッシングが広がった時代をも反映していた。しかし、ニューヨーク・タイムズに大々的な見出しとともに個展が取り上げられること自体が珍しく、それが重要だと周囲からは激励された。そして、その記事のインパクトに翌日から大勢の人々が個展会場に詰め掛けた。

一方、1973年8月号の『ポピュラー・フォトグラフィ』誌に、IKKOの特集が華々しく紹介され、こちらは丁寧な取材による大変好意的な評だった³²。表紙とカラー8頁にわたりアメリカの作品12点を紹介し、写真家で写真評論家でもあるリチャード・ブッシュが、4頁にわたってIKKOの紹介を書き、ポートレートとともに掲載している。IKKOの経歴から、アメリカでの撮影など詳細にわたり、また、言葉を選んで誠実に語る、人並外れて優しいIKKOの印象を伝えている。

アメリカでは、ほかにも様々な雑誌に掲載され、IKKO自身がテレビにも出演し、大きな反響を得ることになる⁽⁴⁶⁾。また、ジョージ・イーストマン・ハウス、ニューヨーク近代美術館、ボストン美術館には作品が収蔵された。IKKOの写真家としての国際的な評価は固まった³³。

第3節 「ニュー・ジャパニーズ・フォトグラフィ」展

1974年3月、ニューヨーク近代美術館で、「ニュー・ジャパニーズ・フォトグラフィ」展（3

月27日-5月19日）が開幕した。15名の日本人写真家の作品187点からなるこの写真展は、アメリカで開催される写真展のなかでも最大規模であり、また、アメリカと日本のディレクターふたりの共同企画という点でも異例の展覧会として注目された。ニューヨーク近代美術館写真部門ディレクター、ジョン・シャーカフスキーと『カメラ毎日』編集次長・山岸章二によるアメリカ初の本格的な日本の写真の紹介である³⁴⁽⁴⁷⁻⁴⁹⁾。

15人の作家はほぼ世代順に展示され、土門拳と石元泰博に始まり、東松照明・川田喜久治・IKKO・細江英公・一村哲也と展開し、内藤正敏・土田ヒロミ・深瀬昌久・森山大道と続いて、秋山亮二・小原健・田村シゲル・十文字美信で終わる。

3月28日には、IKKOのロフトで「現地座談会」が開催された。出品作家を中心に8人の写真家が集った³⁵⁽⁵⁰⁾。IKKOのロフトは、日本の写真家・写真関係者たちにとってアメリカでの最前線であり、ニューヨークに来るとIKKOのもとに立ち寄った。また、海外の写真家たちもIKKOを訪ねており、1974年1月にロバート・フランク（1924-2019）が訪問し、ジャック＝アンリ・ラルティエグ（1894-1986）らとも親交をもった⁽⁵¹⁻⁵³⁾。

1974年5月、IKKOはほぼ4年ぶりに帰国した⁽⁵⁴⁾。秋には、個展「IKKO'S AMERICA」を銀座・新宿・大阪のニコンサロンで開き、翌年春1975年3月に、個展「IKKO」がニューヨークのライト・ギャラリーで開催された³⁶。

そして1975年4月には、写真集『消滅した時間』を刊行する³⁷⁽⁵⁶⁾。アメリカ滞在の集大成となる写真集である。微塵の揺るぎもない硬質なプリントで仕上げたモノクロ100点と、アポロ17号発射をとらえたカラー1点で構成した。4年間のアメリカでの撮影が凝縮されている。アメリカ滞在中も密に交流していた『カメラ毎日』の山岸章二がいる毎日新聞社ではなく、朝日新聞社からの出版だった。朝日の強い希望と、毎日の経済的な理由からだった。

1970年から1974年の写真激変期にアメリカにいたIKKOは、ミュージアムやギャラリーで写真の展覧会や作品の収集が展開していく写真界の動きを見てきた。1978年に再訪すると、それはさらに活発化していた。こうした写真文化の育成には、写真家以外に写真文化を支える層が重要であるとIKKOは主張し、写真を展示する美術館もギャラリーもない日本の現状を嘆いて、数多くの優れた写真家がいる日本で、写真文化を支える人材や支持層がもっと豊かになることを願っていると訴える³⁸。

無論、山岸がその筆頭として念頭にあったであろう。しかし、山岸章二は1979年7月20日に自殺した。当時日本の写真文化を支える最も有能な人材であり、IKKOの盟友であった山岸の死に直面することとなった。

終わりに

IKKOは、アメリカ時代の集大成である写真集のタイトルを『消滅した時間』と名づけた。英文では、『Where time has vanished』であり、『ヨーロッパ・静止した時間』の英文名『Where time has stopped』と呼応し、相対する写真集と自ら位置づけた。人間の歴史の重みに封じこめられたヨーロッパとは異質な、手付かずの地平が広がるアメリカ大陸に對峙し、ドライな感覚で捉えた写真群が展開する。

「その国の中に4年間の間、僕は住んでいたのだった。僕の手で扉が閉じられたとき、その国の光景は、アメリカという舞台の照り返しを受けながら、もはや現実としての時間を消滅させていた。」³⁹

IKKOにとって、「消滅した時間」とは、「地上的な時間の消滅した果てに現われる、在るべき姿への安らぎ」であった。そして、写真はまさにその「消滅した時間」そのものだと考えた。「写真を見返す時、生きる切なさに包まれ、言い知れぬ郷愁の淵にひたるのは、僕達の存在を超えてしまった“消滅した時間”に出会うからだろう」と記す⁴⁰。

IKKOは帰国してから、J.G.バラード（1930-2009）の小説と出会った。そして、アメリカで自らが考えてきたことと近似していると感じたのである。終末世界を独自の筆致で美しく描き出したイギリスを代表するこのSF作家は、「時間」を考察していた。『時の声』（1962）、『時間都市』（1962）に続く『時間の墓標』（1963）では、核戦争後の砂に埋もれた世界で、死者たちのメモリーを記録した「時間の墓」を盗掘する人々を描き出す。現実の外部世界と精神の内部世界が出会い融けあう領域。バラードが追求したものは、IKKOが考え続けたことでもあった。IKKOは、『消滅した時間』の序文には間に合わなかったが、次の写真集『光と波と』の序文をバラードに依頼した⁴¹。

そしてIKKOは、「水のない海」という文を『消滅した時間』に寄せた。「1970年、春の終わり、北アメリカを訪れた僕は、そこにまた巨大な水のない海を見る想いがした」と記す。この海は「ディラックの海」だと感じた。物理学者ポール・ディラック（1902-1984）が、真空の空間は完全に空虚なのではなくて、負のエネルギーを持った電子に充たされているという理論を発表し、底知れぬ海にたとえられて「ディラックの海」と呼ばれた。「アメリカと呼ばれる冷えた大地はそこに住もうとする者にとって巨大な“ディラックの海”にはかならない」とIKKOは語る⁴²。

その真空は、IKKOが少年の日に見た1845年8月15日、終戦の日の青空につながる。

「二つの世界の裂け目のように存在していたその青空は超越的な青さをたたえていました。それは宇宙の真空のひろがりに連なっていると共に僕の心の中にある真空をも目覚めさせてしまったのです。僕はその時から世界と自分について考えはじめました。」⁴³

この青空のような真空を、IKKOはアメリカにもまた感じたのである。

（島根県立美術館 主任学芸員）

2020年、奈良原一高氏は多くの方々に惜しまれつつ逝去されました。その後、2010年に企画・開催した「手のなかの空 奈良原一高1954-2004」の出品作を中心に、貴重な作品をご寄贈いただきました奈良原一高夫人恵子さま、奈良原一高アーカイブス代表・新美虎夫さまに心より御礼申し上げます。

島根県立美術館では、総計 522点のご寄贈をうけ、総数 780点の世界一の奈良原一高写真コレクションとなりました。

また、本論執筆にあたりましてご協力いただき、重ねて御礼申し上げます。恵子夫人には、アメリカでの思い出の数々を語っていただき、深く感謝いたします。

註

- ↑ アメリカ滞在までに刊行した奈良原一高の写真集
『ヨーロッパ・静止した時間』鹿島出版社、1967年(4)
『スペイン・偉大なる午後』、求龍堂、1969年(5)
『ジャパネスク』、毎日新聞社、1970年(6)
アメリカを撮影した奈良原の写真集
『生きる歓び(Celebration of Life)』1972年、毎日新聞社(55)
『消滅した時間』1975年、朝日新聞社(56)
『星の記憶』1987年、PARCO出版局(57)
『ブロードウェイ』1991年、クレオ(58)
『消滅した時間　1970-1974』1995年、クレオ(59)
- ↑ 奈良原の50年代については、下記の拙稿で論じている。
・拙著「《人間の土地》再考－奈良原一高の1954-1956」、『手のなかの空－奈良原一高1954-2004』展図録、2010年、島根県立美術館、pp.234-240、所収。
・拙著「奈良原一高と文学－サン＝テグジュペリとカミュを中心に－《人間の土地》から《王国》へ」、『美術科研究』第30号、大阪教育大学美術教育講座・芸術講座、2013年、pp.35-43、所収
・拙著「壁－奈良原一高『王国』再考」、新装版『王国　奈良原一高』、復刊ドットコム、2019年、pp.198-203、所収
・拙著「廃墟の詩　奈良原一高『無国籍地』1954』、『島根県立美術館紀要　第1号』、島根県立美術館、2020年、pp.43-56、所収
・拙著「奈良原一高・真鍋博とグループ『実在者』の仲間たち1954-1956』、『島根県立美術館紀要　第2号』、島根県立美術館、2021年、pp.31-64、所収
- ↑ 奈良原一高のアメリカ時代については、本稿のほか下記でも論じている。
美術講座「IKKO'S AMERICA　奈良原一高のアメリカ時代」、講師：蔦谷典子
2023年10月29日(日)、島根県立美術館ホール。
・拙著「消滅した時間　奈良原一高のアメリカ」、奈良原一高『消滅した時間』2025年5月、復刊ドットコム、収録予定
- ↑ 鬮嘯はケンタッキー滞在を経て、1970年6月にニューヨークのロフトに戻ったのち、8月以降は東京とニューヨークを往復する日々を送った。
「池田満寿夫の版画」展(ニューヨーク近代美術館、1965年8月10日～9月19日)
- ↑ 「太陽のハワイから、雨の日のニューヨークに着いて一週間経ちました。」と記された1970年4月28日付の奈良原のはがきから、4月21日頃に到着したと考えられる。
- ↑ 「ダイアン・アーバスと僕－1971年のノート」、『ユリイカ』1993年10月号、pp.134-157所収。奈良原一高/著、勝井三雄・蔦谷典子/編『太陽の肖像　文集』、白水社、2016年、pp.214-253、再録
- ↑ diane arbus. Edited and designed by Doon Arbus and Marvin Israel, New York City, 1972
「ダイアン・アーバス写真展」1973年6月、西武百貨店池袋店、主催：毎日新聞社・カメラ毎日、写真集日本語版：編集人・山岸

- ↑ 章二、発行人・堤清二
- ↑ ロック・フェスティバル「生きる歓び(Celebration of Life)」ルイジアナ州、マックレア、1971年6月23日～28日、一高《ロック・フェスティバル　生きる歓び(Celebration of Life)》、『カメラ毎日』1971年10月号、表紙、pp.9-40、一高「緑の平原の容赦ない太陽のもとでの6日間　ロック・フェスティバルへの参加」、pp.41-48、『太陽の肖像』前掲書、pp.254-279再録
一高(IKKO)写真集『生きる歓び(Celebration of Life)』1972年、毎日新聞社
- ↑ 一高「大西部の旅から帰って」、『カメラ毎日』1972年3月号、pp.39-41
- ↑ 《壊れたウォーター・タンク－アリゾナ》1971年、『消滅した時間』朝日新聞社、no.43、『星の記憶』no.31とno.32の間(頁番号なし)
- ↑ 《砂漠を走る車の影－アリゾナ》『消滅した時間』、朝日前掲書、no.2
《near page, Arizona》1971年、『カメラ毎日』1972年3月、no.6
- ↑ 《グランド・キャニオン－アリゾナ》、『消滅した時間』朝日no.17、作品解説
- ↑ 『星の記憶』no.31とno.32の間(頁番号なし)
《人口湖の見えるブルサイド－ユタ》、『消滅した時間』朝日前掲書no.1、
《レイク・パウエルの水路－ユタ》、『消滅した時間』朝日前掲書no.11
- ↑ 《ホワイト・サンズの稲妻－ニュー・メキシコ》、『消滅した時間』朝日前掲書no.6作品解説
- ↑ 《二つのごみ罐－ニュー・メキシコ》『消滅した時間』朝日前掲書no.7作品解説
- ↑ 《ガソリンスタンド－ニュー・メキシコ》『消滅した時間』朝日前掲書no.18、タオス・プエブロ、
《山の中のレストラン－ニュー・メキシコ》『消滅した時間』朝日前掲書no.19、レッド・リバー
- ↑ 《ロックバンド－アリゾナ》『消滅した時間』朝日前掲書、no.49、作品解説
- ↑ 《刻まれた矢印－アリゾナ》『消滅した時間』朝日前掲書no.10、作品解説
- ↑ 奈良原一高「水のない海」『消滅した時間』朝日前掲書
- ↑ 『白い征服者との闘い　アメリカ・インディアン酋長レッド・フォックスの回想』レッド・フォックス記述、キャッシュ・アシャー編集、秋山一夫訳、サイマル出版会、1971年12月20日初版、1972年6月20日3版、p.20
- ↑ 『白い征服者との闘い』前掲書
- ↑ 《South Dakota Mt. Rushmore National Monument 1972》『星の記憶』no.62
- ↑ 『星の記憶』前掲書、no.49とno.50の間
- ↑ 「水のない海」朝日前掲書
《ゴースト・シティの少女－ジェローム、アリゾナ》『消滅した時間』朝日前掲書、no.52、作品解説
- ↑ 《アポロ17号－フロリダ》『消滅した時間』朝日前掲書no.101

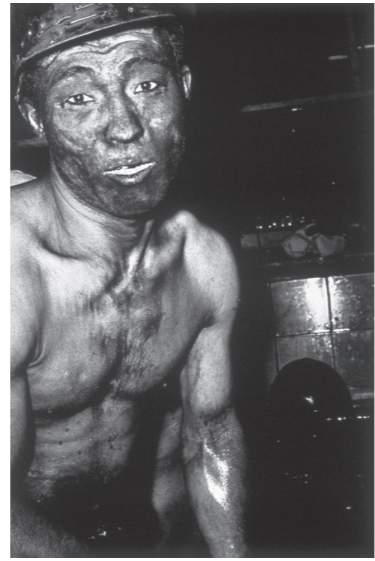
- ↑ 一高「アメリカの空」『カメラ毎日』1973年9月号、no.1、no.14同図、ソラリゼーション
- ↑ 奈良原一高「宇宙への郷愁』、『消滅した時間』クレオ前掲書、1995年
- ↑ 「水のない海」朝日前掲書、1975年
- ↑ 縦断は、1971年のロック・フェスティバル参加も含めると、1972年のアポロ17号発射に立ち会ったフロリダと2回となる。1971年の方をフェスティバル参加が主目的として、数えないこともある。クレオの前掲書には、横断・縦断あわせて4回と記している。
- ↑ 池田満寿夫「IKKOと私』、『六月の風』16号、1976年
- ↑ 池田満寿夫「IKKOと私』、前掲書
- ↑ Gene Thornton, “Photography　Ikko : From Japan To Manhattan”, The New York Times, Sunday,1971
- ↑ 「IKKO'S AMERICA』、『POPULAR PHOTOGRAPHY』、アメリカ、1973年8月
ポピュラー・フォトグラフィ誌のアート・ディレクターSintarou Torahは、写真集『生きる歓び』のデザインをしており、IKKOの理解者でもあった。
- ↑ 1973年、ジョージ・イーストマン・ハウスに作品が収蔵される。1974年、ニューヨーク近代美術館、ボストン美術館に作品が収蔵される。
- ↑ 小久保　彰「ニューヨーク近代美術館　ニュー・ジャパニーズ・フォトグラフィー展第1報』『カメラ毎日』1974年5月号、pp.45-48
特別企画「ニューヨーク近代美術館　ニュー・ジャパニーズ・フォトグラフィー展への招待』、『カメラ毎日』1974年6月号、pp.39-107
シャーカフスキーと山岸は、ダイアン・アーバス展でもタッグを組んでおり、奈良原も関わっていた。
- ↑ 「二人の施工人がニューヨークのど真中に日本家屋を建てた』、『カメラ毎日』1974年6月号、pp.99-103。毎日新聞学芸部の佐藤健を司会に、秋山亮二、IKKO、小原健、十文字美信、田村シゲル、土田ヒロミ、深瀬昌久、特別参加として植田正治が集った。
- ↑ 個展「IKKO'S AMERICA」、ニコンサロン・銀座：1974年9月17日～29日、ニコンサロン・新宿：1974年10月1日～7日、ニコンサロン・大阪：1974年11月1日～15日。
個展「IKKO」、ライト・ギャラリー、ニューヨーク：1975年3月4日～29日、アメリカ滞在中の未発表の写真20点を出品。
- ↑ 『消滅した時間』、1975年4月30日、著者：奈良原一高、装幀・レイアウト：勝井三雄、発行：朝日新聞社－一角田秀雄、印刷所：凸版印刷株式会社
- ↑ 奈良原一高「アメリカ現代写真の演出『鏡と窓』展をみて』、『日本カメラ』、1978年11月号、pp.150-151
- ↑ 「水のない海」『消滅した時間』朝日前掲書
- ↑ 奈良原一高「宇宙への郷愁』『消滅した時間』クレオ前掲書
- ↑ J.G.バラード「結晶する海の彫塑』、『朝倉響子彫塑集　光と波と』1980年、PARCO出版、所収

- ↑ 一高「ディラックの海』『カメラ毎日』1974年11月号、p.57
「水のない海』『消滅した時間』朝日前掲書
- ↑ 一高「ディラックの海』前掲書
- ↑ 『生きる歓び』『消滅した時間』(朝日新聞社、クレオ)、『星の記憶』以外のアメリカを撮影した写真集は下記の通り。
・『SEVEN FROM IKKO』1976年12月、ウナック・トウキョウオリジナル・プリントによるポートフォリオ。
・写真集『ブロードウェイ』1991年、クレオ
1977年(昭和52)年5月に、個展「ブロードウェイ'73～'74」(飯田画廊別館、東京、24日-6月4日)が開催されている。碁盤の目のようなマンハッタンの道路の中で、唯一斜めに走るブロードウェイに魅せられ、各交差点の四隅から対面する建物と路面の表情を、魚眼レンズを使って撮影しカラーージュした。このシリーズのコンセプトualな方向性は、《光の回廊－サン・マルコ》につながっていく。

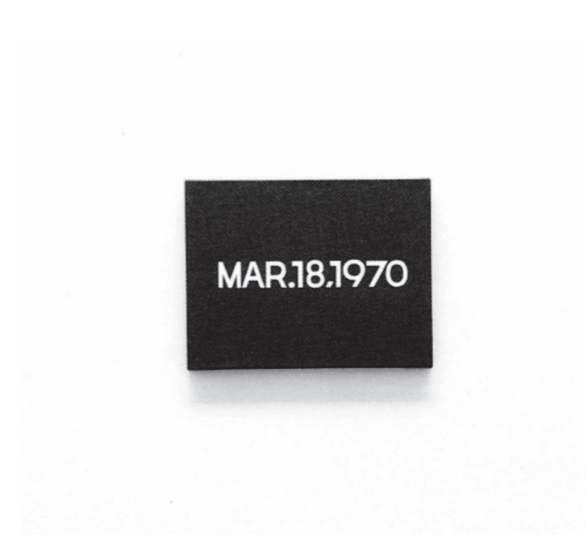
50年代三部作



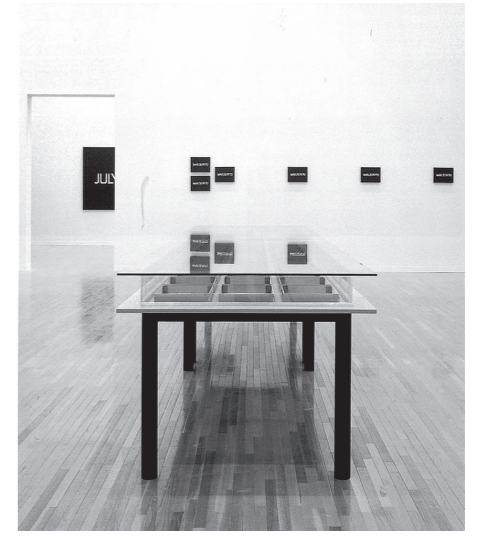
1.《無国籍地》 1954年 島根県立美術館蔵



2.《人間の土地》 1956年 島根県立美術館蔵



7.河原 温《デート・ペインティング》 1970年



8.『河原 温 全体と部分 1964-1995』カタログ
東京都現代美術館、1998年より

60年代三部作



3.《王国》 1958年 島根県立美術館蔵



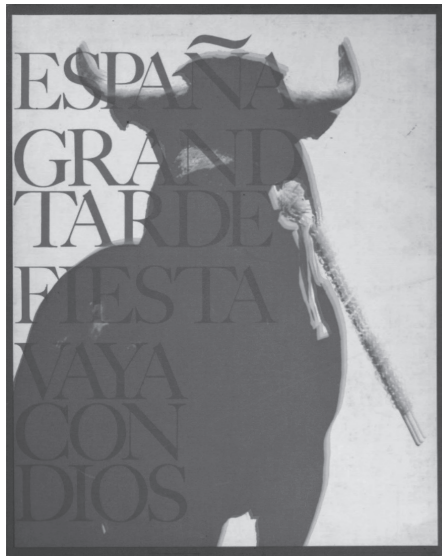
4.『ヨーロッパ・静止した時間』 1967年



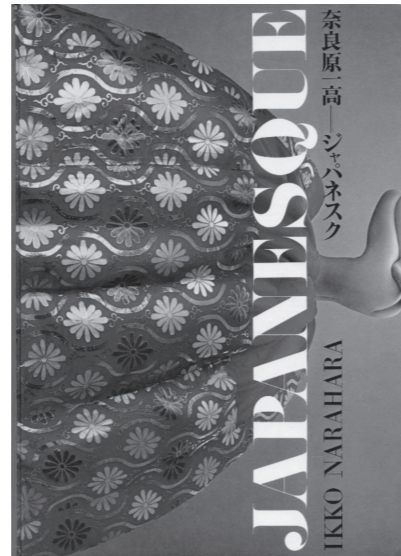
9.アメリカ時代の池田満寿夫



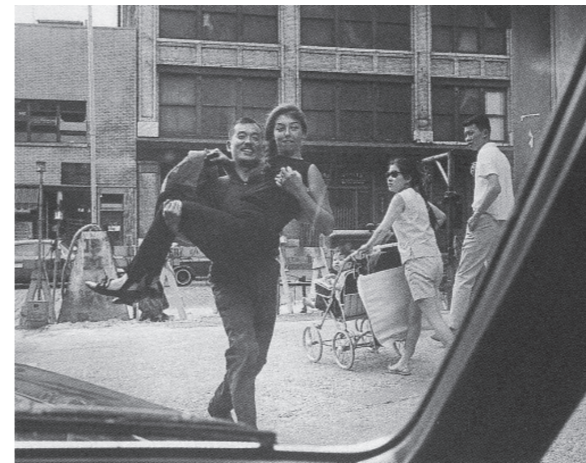
10.《彼女の会話〈ロケーション・アンド・シーン〉》 1970年



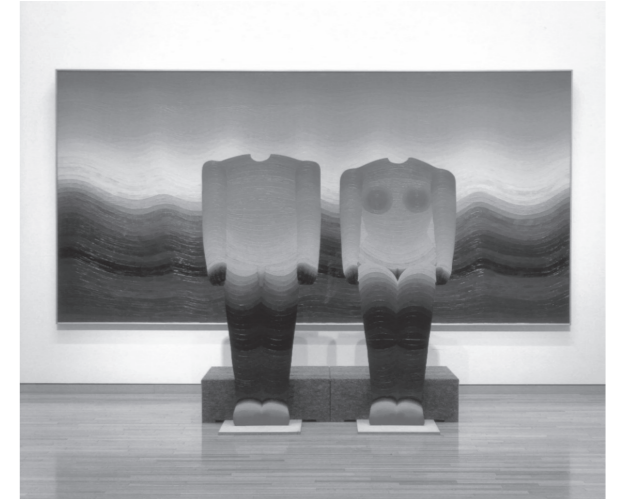
5.『スペイン・偉大なる午後』 1969年



6.『ジャパネスク』 1970年



11. アラン・カプローのハプニングに参加する髪嘔
1965年8月 photo©Peter Moore



12. 髪嘔《レインボー・エンパイラメントNo.1 レインボー・ルームより
レインボー・ランドスケープC&男女の人型》 1964年
東京都現代美術館



13. ロフト屋上の奈良原一高



14. 夫婦でロフトの大改造



19. 奈良原一高《ジャクリン・マスクの二人ーニューヨーク》
1970年 島根県立美術館蔵



.diane arbus.

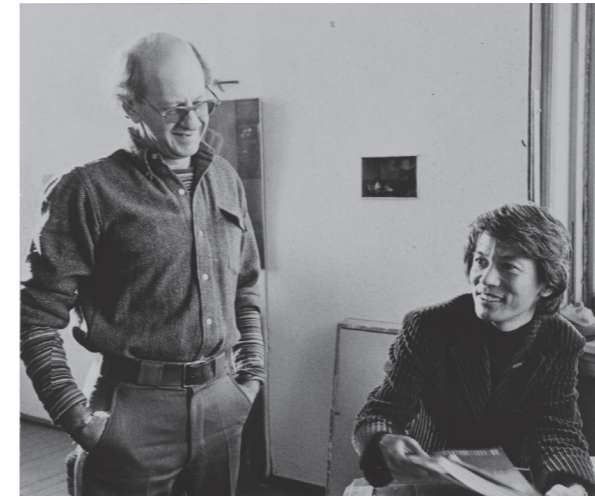
20. 「ダイアン・アールバス展」図録表紙 ニューヨーク近代美術館
1972年11月7日～1973年1月21日
「ダイアン・アールバス写真展」西武百貨店池袋店
1973年6月1日～13日



15. 夫婦でロフトの大改造



16. 夫婦でロフトの大改造



21. ダイアン・アールバスの友人マービン・イスラエルと山岸章二



22. インニスから先はヒッチハイク。
会場まで13マイル（約21km）マイル。
カメラの方に顔を向けるのは、恵子夫人。
地面の影は、シャッターを押すIKKO
（『カメラ毎日』1971年10月号）



17. 完成したロフトで
右から：IKKO、恵子、山岸章二、撮影：山岸享子
（『カメラ毎日』1972年3月号）



18. ダイアン・アールバスのワークショップ 1971年
撮影：エヴァ・ルビンシュタイン



23. Ikko 《Celebration of life》
（『生きる歓び』毎日新聞社、1972年）



24. Ikko 《Celebration of life》
（『生きる歓び』毎日新聞社、1972年）



25. Ikko 《Celebration of life》
（『生きる歓び』 毎日新聞社、1972年）



26. Ikko 《Celebration of life》
（『生きる歓び』 毎日新聞社、1972年）



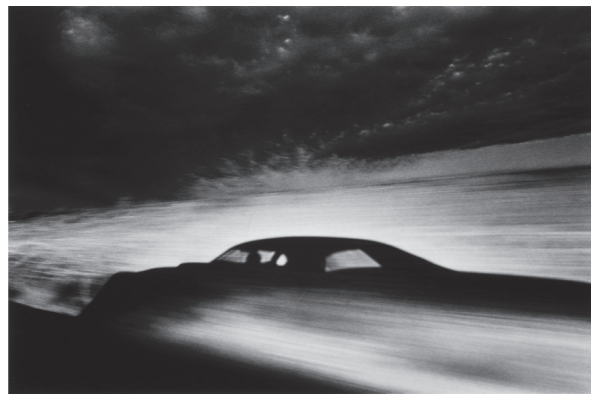
31. 《レイク・パウエルの水路ーユタ》 1971年
島根県立美術館蔵



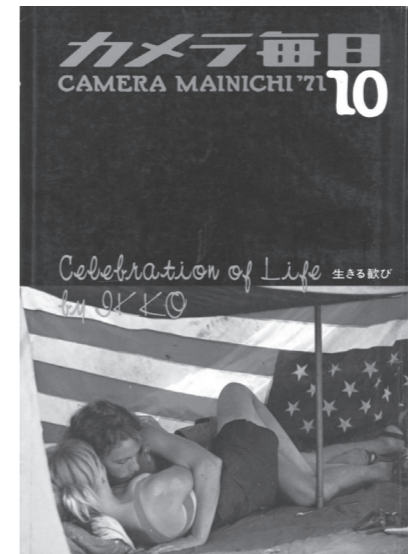
32. グランド・キャニオン南壁に立つIKKO
（『カメラ毎日』 1972年3月号）



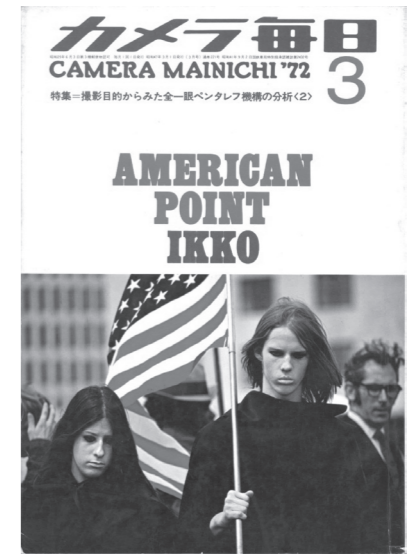
27. 《壊れたウォーター・タンクーアリゾナ》 1971年
島根県立美術館蔵



28. 《砂漠を走る車の影ーアリゾナ》 1971年
島根県立美術館蔵



33. 『カメラ毎日』 1971年10月号



34. 『カメラ毎日』 1972年3月号



29. 《グランド・キャニオンーアリゾナ》 1971年
（『消滅した時間』 朝日新聞社、1975年）



30. 《人工湖の見えるプールサイドーユタ》 1971年
島根県立美術館蔵



35. 移動中のIKKOとKeiko



36. 《ホワイト・サンズの稲妻》 1972年
島根県立美術館蔵



37.《二つのゴミ罐 — ニュー・メキシコ、1972》 1972年
島根県立美術館蔵



38.《ロックバンドーアリゾナ、1972》 1972年
島根県立美術館蔵



43. ナイクルー・ギャラリー 1973年3月28日 - 4月29日



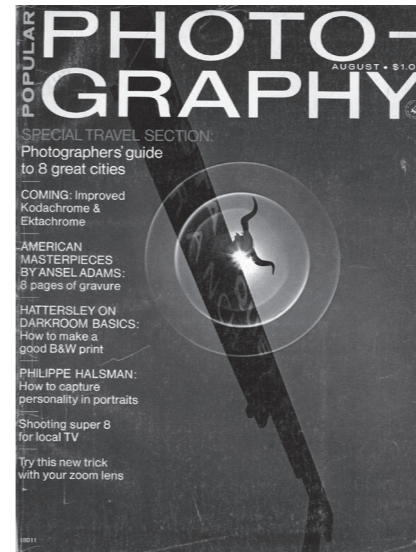
44. ニューヨークタイムス 1973年



39.《刻まれた矢印 — アリゾナ》 1972年
島根県立美術館蔵



40.《サウスダコタ州ラッシュモア山国立記念碑》 1972年



45. ポピュラーフォトグラフィ 1973年8月



46. 1973年3月〜4月にニューヨークで開催された個展について、
現地のテレビに出演したIKKO。『カメラ毎日』1974年11月号



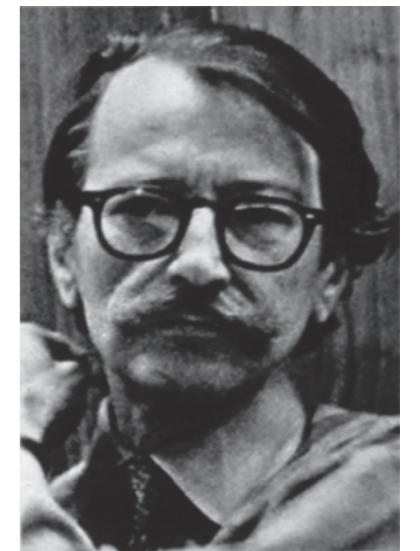
41.《ゴースト・シティの少女ーアリゾナ》 1971年
島根県立美術館蔵



42.《アポロ17号ーフロリダ〈消滅した時間〉より》 1972年
島根県立美術館蔵



47. 1974年 ニューヨーク
土門 拳、石元泰博、東松照明、川田喜久治、IKKO
細江英公、深瀬昌久、一村哲也、内藤正敏、土田ヒロミ
森山大道、秋山亮二、小原 健、十文字美信、田村シゲル
(『カメラ毎日』1974年6月号)



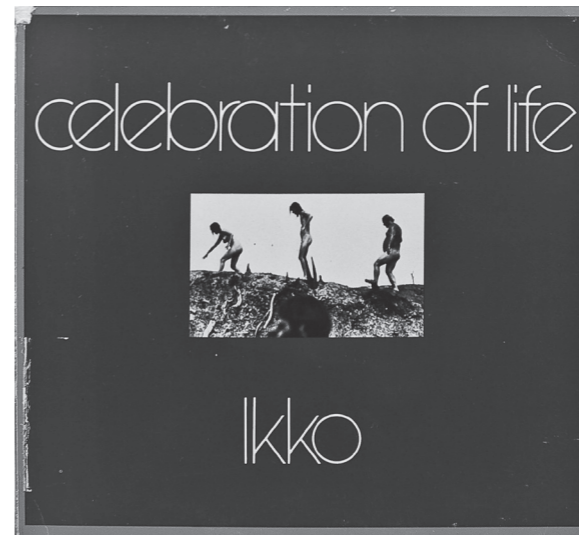
48. ジョン・シャーカフスキー (『カメラ毎日』1974年6月号)



49. 山岸章二 (『カメラ毎日』1974年6月号)



50. 1974年3月28日、ニューヨークのIKKOスタジオで
右端IKKO、左へ田村シゲル、深瀬昌久、秋山亮二土田ヒロミ
十文字美信、植田正治、小原健、佐藤健 (毎日新聞学芸部)
撮影：奈良原恵子 (『カメラ毎日』 1974年6月号)



55. 『生きる喜び』、毎日新聞社、1972年



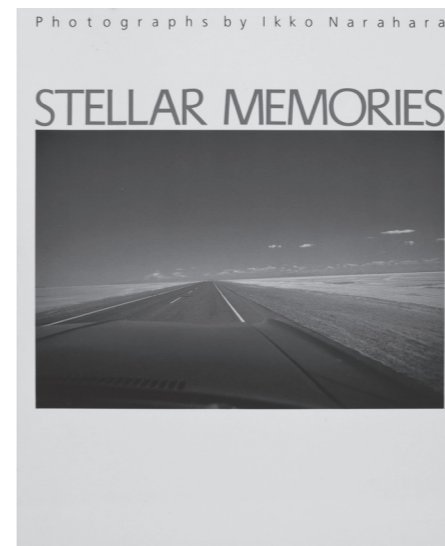
56. 『消滅した時間』、1975年、朝日新聞社



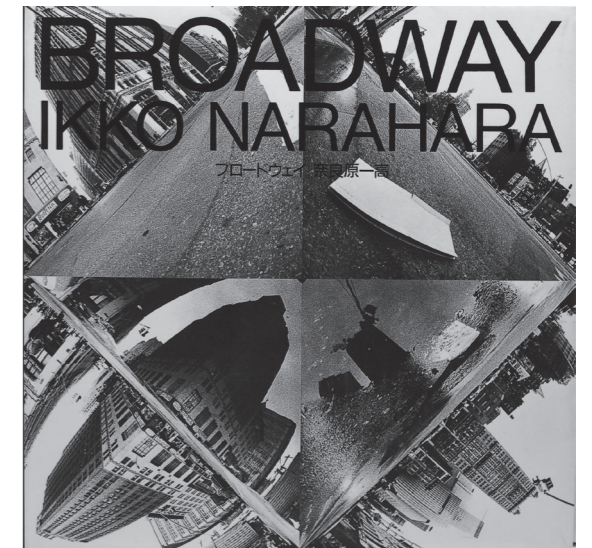
51. ロバート・フランクとIKKO。
1973年12月30日の朝、奈良原のロフトを訪ねてきた。



52. 鏡の左から、
細江英公、ラリー・クラーク、ライフ・ギブソン、IKKO



57. 『星の記憶』、1987年、PARCO出版



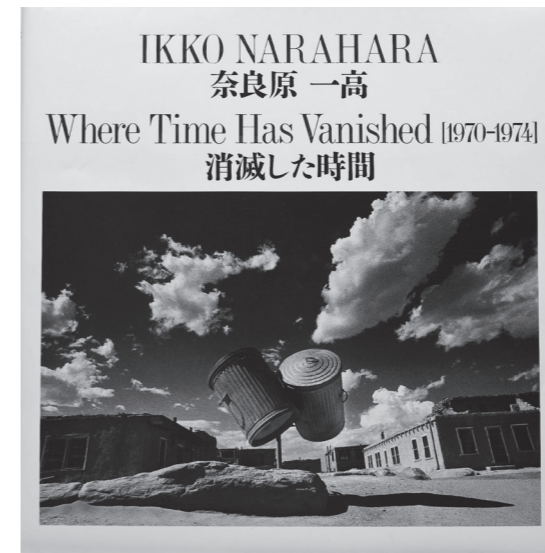
58. 『ブロードウェイ』、1991年、クレオの表紙



53. 左から、
Keiko、ジャック・アンリ・ラルティエグ、ラルティエグ夫人、IKKO



54. 「VIVO」の旧友会
1974年7月2日「おかえりなさいIKKO いってらっしゃい佐藤明」
前列左から：川田喜久治、丹野章、IKKO、恵子夫人
中列左から：ひとりおいて、佐藤明、東松照明
後列左から：山岸章二、大倉舜二、細江英公、陸角一三
都筑弘雄、佐藤夫人、飯島昭、桜井秀。



59. 『消滅した時間 1970-1974』、1995年、クレオ

© Narahara Ikko Archives
1, 2, 3, 4, 5, 6, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29,
30, 31, 32, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 50, 51, 55, 56, 57, 58, 59

島根県立美術館研究紀要 第6号

令和7年3月31日

編集・発行 島根県立美術館

© Shimane Art Museum 2025